



身につけたい「生きがい」など様々な項目が上位に挙がっていた。「人は恐らく、お金だけではない何かに突き動かされ、何かを得るために仕事をしているのだ」と著者。むしろそれゆえに生じる「負の側面」も忘れてはならない。著者はさらに雇用形態や賃金の問題など、「働く」現実を様々な角度から見ている。なぜ、大卒か？

「働く」ことは人間が生きて上で重みをもつ一方、成熟経済期にある日本は、従来のように立身出世を目指して死にもないで勉強するような状況にはない。それでも多くの人が「大学ぐらいは出ておくべきだ」という。なぜだろう？

著者はその理由を「就職に際して門前払いされるリスクが低いこと」「労働条件のいい仕事や

職業に就きやすいこと」「賃金が高いこと」の3点から解説する。新卒採用時には、企業も学生も互いの完全な情報は得られない「情報の非対称性」の問題が生じる。雇う側（企業側）が大量の応募者の中から採用者を絞るには、情報の非対称性を克服すべく「求職者の属性に関わる過去の平均値を手がかりに見抜こうと」する。この属性の一つが「学歴」なのである。

学歴は履歴書一枚でわかる。高卒者と大卒者で過去の仕事のパフォーマンスが異なっていれば、学歴を手がかりとするのは合理的。これが経済学で言う「統計的差別」で、平均的に間違いの少ない判断と見なされている。一方、大卒者が高卒者より賃金が高い理由について、著者は教育経済学の「人的資本論」と「シグナリング論」で説明する。

まず「人的資本論」は「大卒者は、大学で学ぶことによって高卒者よりも人的資本が増大し、その分仕事で高いパフォーマンスが生み出される。だから高賃金となる」という考え方である。

この場合の「人的資本」とは、具体的な知識や技能のみならず、大学生活を通じて得られた「人間関係」（人的ネットワーク）など、有形無形の「チカラ」を表す。これらが社会で役立つのだ。もう一つの「シグナリング理論」は、「大卒者ということが入試を突破できるだけの『チカラ』を持っていることの『シグナル』になるので、その『シグナル』に基づいて雇う側は高賃金を設定することである。

だが大学進学率5割を超えた現在では、「大卒というシグナル」だけでは不十分。そこで浮上するのが「出身大学」である。1990年代には「学校歴不問の採用」が流行した。しかし蓋を開けたところ、「内定を得たのは圧倒的に有名大学出身者に偏っていた」という。「出身大学はシグナルとしての精度が高い」と著者も見ると。加えて今は「入試制度」もシグナルにされる。「学力試験を課されない推薦入試を利用した人は、その人が発する大卒者あるいは学校歴の『シグナル』は、学力面は弱い

と見なされる」ためだ。もっとも医師や薬剤師など、大学で身に着ける専門性が仕事に直結する分野の学生に対しては、「人的資本論」のウェイトが高いのに対し、社会学部など専門性が仕事に直結しにくい分野の学生は「シグナリング理論」で捉えられるなど、学部による違いもある。以上から、「チカラ」を身につけることが期待でき、「シグナル」としても有用な大学が、「働く上で有利な状況を作り出す」と著者はまとめる。それでは受験生は何をすべきか。本書はこの後、「選択肢を自分で狭めない」ために必要な高校での勉強や、大学での学び方、身に着けるべき「チカラ」へと展開される。「正課を骨までしゃぶりつくす」「本分を貪欲に追求することによって一回りも二回りも大きくなる。その成果で勝負して欲しい」と著者はエールを送る。高校時代のみならず、大学入学後に再度本書を開き、自分を育む大学生活のデザインを改めて考えてほしいところだ。（評）福永文子

浦坂純子・著（ちくまプリマー新書刊〈定価760円＋税〉） 『なぜ「大学は出ておきなさい」と 言われるのか キャリアにつながる学び方』

多くの人のとって大学卒業後に待つの「仕事」の世界である。そんなの入学してから考えればいい：と思っていれば、いつの間にか就職活動。高校時代から「働くことと学ぶこと」のつながりを描いてきたかどうかで、活動の内容も大きく異なる。

そこで今号は、浦坂純子著『なぜ「大学は出ておきなさい」と言われるのか キャリアにつながる学び方』（ちくまプリマー新書）を読む。本書は大学で学ぶことと働くこととの関係を、読みやすく、愛情あふれる語り口で綴った一冊である。

「道の曲がり角」で

「大きくなること、大人にな

ること」と「仕事をする」と、職業に就くこと」は不可分なものである。だが幼いころの将来の夢レベルの「なりたいたいもの」から卒業し、仕事や職業について現実的に考え始めるタイミングが来る。これを著者は『赤毛のアン』の最終章タイトルを引用し、「道の曲がり角」と呼ぶ。

高校を卒業する18歳は人生最初の「道の曲がり角」である。だが受験生の多くは、『なりたいたいもの』は二の次で、それと深く向き合うことを『とりあえず（どこでもいいから？）大学に入ってからや』と先送りしてしまっている部分があるので、この時期には、子どものころ

のような漠然とした「なりたいたいもの」ではなく、現実的な「なれるもの」へとブレイクダウンしていくのが「必要不可欠な作業」。実際には、「〇〇になりた」と言える仕事や職業に就けるのはごく一部の恵まれた人たち。多くは「自分の土台をしつかりと作り、職場を得て、地味な仕事を毎日繰り返しながらもキャリアを築いていく人のほうが断然多い」と著者は言う。だからこそ、「なりたいたいもの」から「なれるもの」へ、さらに「なれるもの」をどう「なつてよかつたもの」にするか、円滑なブレイクダウンが重要になる。

まず著者は「働くことを考察するための素材」を示す。「今

の自分の延長線上に『働く』ことを明確に意識するためにも、『働く』ことの現状がどうなっているかを認識しておいて欲しい」からである。

本書では働くことについて「5W2H」で解説されている。「いつ働く期間と時間」「誰が失業と非労働力状態」「どこで何を・無数の仕事や職業」「なぜ人はお金のみにて働くるものにあらず？」「どのようにな正規と非正規」「いくら賃金のお話」の7つの観点だ。

例えば「なぜ」の項。人が働く第一の目的はもちろん、「生活費を稼ぐこと」でもそれだけ？大卒生涯賃金に近い3億円の宝くじが当たっても、著者は仕事を「辞めへんな、多分」と言う。人が仕事に見出す価値は様々である。例えば財団法人社会経済生産性本部と社団法人日本経済青年協議会による、2008年の新入社員への「働くことの意味」調査の第一位は「仕事を通じて人間関係を広げていきたい」だった。他にも「社会や人から感謝されたい」「専門技能を